

御飯 御香の物大こん

一 御焼物 鯛塩焼 一 御取香 五品

一 御吸物 のり 一 御菓子五種

一 御薄茶 こち 一 御せんし茶

御留主居 太内利左衛門殿 桜川武次殿

挨拶二三度被成候

引取候前

今般旦那初入ニ付先例之通被相送候旨にて、御晒子ニツツ、広ふたニのせて御留主居被申渡候、春松殿貴様義者跡より被相送候間其趣承知被致置候旨ニ御座候、難有旨御請申上ル

一 跡よりと申義、近例之御記録二者

富田御隠居様

大谷御隠居様

敬翁様 御三代様御代之節、私木津や両人二者御小袖被下置候御

記録 御屋敷ニ留り有之、右ニ付跡より被下候義ニ御座候

外々一統江者御晒子ニツ宛被下候

尤私江も留主居先例御噂も御座候

春松御返答左之通り申上ル

御先例御小袖拝領仕候旨申上ル、速水春作様京都御勤御座候節哉、

今般御初入ニ付阿波守様より御小袖被下ル、依之屋敷江頂戴ニ可

参旨、御手紙被下候御紙面も御座候、其余御初入之節者御小袖頂

戴仕候旨、只記録ニ相見申候と申上ル

留主居被仰下候二者、古キ書留ニは御晒子之処も相見候へ共 御

三代様程前々之書留小袖と相見申候、右ニ付取しらへ中にて有之候、追而沙汰可致候間相心得居候様被仰下候、難有御請申上ル、私御願申上度奉存候 御小袖も拝領久敷無御座候間、何卒頂戴仕度何分宜奉頼上候、尤家督之節拝領仕、其後御入之節拝領仕候而より久々無御座候間、宜御取斗奉頼上候旨申上ル、留主居御承知被成候

一 御家督ニ付献上物

一 大鷹大緒 一 掛差上ル

御披露状添テ京都御屋敷江持参仕ル

御家督御年号

文化十四九月七日被為 仰蒙候

一 御初入ニ付献上

一 御扇子 五本人 一箱居台のし

伏見御着座之節差上ル

一 御煎茶 一箱台のし

是ハ例毎なり

一 御家督之節御扇子差上候而、御初入之節伏見御着之御時大鷹緒

差上 候方宜敷御座候、此度ハ前後ニなり申候、京御屋敷へ者此段

申上、前 後之処御含置被下候て無難相済申候

右献上物ニ付委キ者、文十四年文化十一戊年記録ニ控置申候

一 昨酉年 御初入之御例式御座候之処、

敬翁様御不例ニ付御式万端今年 御初入之御式御座候

一 御国御家中様方之向、御式昨戌冬御座候旨承申候、御家中江御料

理被 下候ニ付

一御薄茶別儀六斤余御煎茶朝日六斤ヨ被仰付候、此度ハ御国花ヤ太
伊五郎先被仰付候

一別儀 五斤 挽候て相納候旨ニ御座候

挽料斤六匁ツ、被下候

一朝日 御煎茶 貳斤被仰付候

一当年伏見ニおいて折鷹御煎茶献上仕候処、鈴江氏御箱ノ口ヲ御明
御覽被入候処、事ノ外御カンシン被遊候て御蒸菓子十五御内々拝
領仕候、御側大口秀之丞殿も御かんしんの旨御噂御座候、何とそ
御用被仰付被下候様願上申候、止而御沙汰あり候旨被申候

御家老 元メ

蜂須賀駿河様 林弥五右衛門

御年寄 目付

西尾数馬様 中尾宗兵衛

同 同

長坂三郎左衛門様 森平馬

御茶道

一 一 鈴江宗羽老

同

一長濱栄次殿 一露木蘭齋老

医師

一加藤枘助殿 一渡辺一解老

一仁尾兵太殿 一伊月了附十老

一三間雅兵衛殿 一三木莫伯老

奥坊主

一佐々木桂右衛門殿 一久次米茂益

一 大口秀之丞 一久次米秀輔
一 伴剛太郎 一 三宅兼膳

一 此度御家中方音進例之通

蜂駿河様斗者初而二付 御扇子一箱 三本人

御せんし茶同 半斤

のし居台

一 御茶用相願置

近々被仰付可被下候旨御含可被下候

三月十五日宇治見物御出被成候

十六日八幡御参詣被成候、又々御帰之節宇治御出之旨用人衆噂有之

申候

一 蜂駿河様 佐々木桂右衛門

齊藤愛之助 林 善太夫

長谷川鶴之助 増田哲次

一 林弥五右衛門様 伴剛太郎

中尾宗兵衛様 大口秀之丞

森平馬様 庄野賀次郎

仁尾兵太様 坪内三記之助

加藤枘助様 三宅源之介

齊藤多司馬様 根本源左衛門

長濱栄次 津田彦之丞

三間雅兵衛 安田増太郎

足助幾代太 久次米茂益

加島賢之助 久次米秀輔

若山正三郎 三宅兼膳

矢上仁右衛門

林 善太夫

増田哲次

渡辺一解

伊月了附十

三木莫伯

舟越伊織

立木文作

森夫左衛門

□川篤之丞

市原乙三郎

原軍左衛門

加古數馬

加藤半次

伊月忠兵衛

多田孫兵衛

樋口丑之助

右名前宿札之通り記ス

一此度到来物

一渡辺一解より 塩蒸玉子 十五

足袋 一足

一林善太夫より 煮取 一壺

一鈴江宗羽老 たはこ 二包

文化十西九月御家督二付御当職より京御屋敷へ参り候御書付之趣留

置

一筆令啓達候今般 御隠居御家督御願之通被蒙 仰候、依之京住

又者其許居合之面々、太守様江格々列而名書目錄を以御肴一折宛

御隠居様江右同断夫々差上御賀可申上候様可被申聞候、恐惶謹言

佐渡美濃 判

九月廿二日

蜂須賀駿河 判

西尾源右衛門殿

太田章三郎殿

尚以本文御賀申上候

太守様 御隠居様江者御奏者江 御前様江者奥懸り御目附江右よ

り可被懸合候、且右恐悦二付京大坂御出入寺社丁人共義、使者等

指越候義者御取約中之事二候得者可被差留候、以上

右一通

一筆令啓達候、太守様御事 阿波守様、御隠居様御事 敬翁

様与 御名務御願之通被為濟候二付、京住又者其許居合之面々、

太守様 御隠居様 御前様江右御賀可申上候

右之段得其意夫々可被申聞候恐惶謹言

佐渡美濃 判

九月廿四日 蜂須賀駿河 判

西尾源右衛門殿

太田章三郎殿

右老通 都合式通

当 殿様御家督之節者左之通献上

一御扇子 五本入 一箱 御のし居台

一御鷹大緒 一箱 同

但シ一懸むらさき

御初入二付

一御扇子 一箱 御のし 伏見御着之上

居台 献上二相成ル

右之通献上仕候、御屋鋪江持参仕候而御役所から御留主居江御指出

之事、御披露状添て

右献上物之處者

御家督之節 御扇子斗

御初入之節 御鷹大緒上ルかた宜御座候

此度之処吟味不行候ニ付右之通ニ相成ル、以来相心得可申候事

一御隠居様江献上

一御煎茶 壺箱 のし居台

一御手焙 一ツ 箱入 御のし

ばん石宗ほん形

右御屋敷へ持参仕候

御披露状相添

右之通御座候、委事者文化十同十一年記録ニ留置申候、相しらへ可

申候事

一今度御入ニ付借り物覚

二見光淋之筆画

一なんばん置花生

右二品宗見ニて借用

一光信筆鷹之屏風

右恵心院ニて借用

一宗和形家具 式拾人前 竹助より

一同 拾人前 指六より

此外不残内之道具用イ候

一取持之人 宗見 味卜 卜意

手代分

指六 栄蔵 籐蔵

日用八人

頭弥平 塩弥平 与助 岩吉 文二郎 庄兵衛 辰吉 久兵衛

料理方藤吉 京より老人

肴横落権兵衛 青物京

肴ものよとあけニ致させ申候、此段権兵衛へたのミ申候

一太守様江戸御着座之由四月八日京へ御尋ニ遣申候処、三月廿九日

無御 滞御着座之旨申来ル

以 手紙致啓達候

阿波守殿先達而初人之為祝儀、今般鹿抹之料理被申付、於当屋鋪

進可 申処、狭少ニ付丸山や阿弥ニ而相催候条、来ル廿九日正未刻

御出被成 度候、此段被申付越候ニ付如斯御座候、以上

四月廿三日 西尾源右衛門

上林春松様

右御手紙四月廿四日木津やより達ス

御手紙被下忝拜見仕候、然者

殿様御初入之為御祝儀、今般御料理被下置候ニ付、来ル廿九日正未

刻参上仕候様被仰下、不相替頂戴仕参上可仕難有仕合奉存候、猶以

参御礼可申上候得共、先御請申上度以書中申上候、以上

四月廿六日 上林春松

西尾源右衛門様

御請

阿部祐右衛門様

太内利左衛門様

桜川武次様

右三人之御方江も以書中御礼申上置候

御手紙致拜見候、弥御堅栄奉賀候、然者、来ル廿九日料理進申義ニ

付御丁寧之御書面被入御念候義奉存候、尚御待申候間心事期拜顔候、

以上

四月廿六日

桜川武次

太内利左衛門

阿部祐右衛門

上林春松様

一御初入之御祝儀御料理

一御国江戸京大坂伏見夫々被下候旨承知仕候、御国ニテハ御祝儀

御用御挽茶別義拾五斤程、朝日御煎茶拾五斤程被仰付候先例ニテ

御座候、此度之処も、御国蔵や太伊五郎迄上林之別儀参り来り候

ハ、五六斤持参可仕旨被仰付候、折節別儀之代り先差懸り候事故、

三十代ヲ別儀として太伊五郎より相納メ申候、尤挽候而納ル、御

煎茶も五六斤被仰付候、山吹朝日取ませて

右之御様子ニテ御座候間、以来之処御国江戸京とも其時之前以テ御

願可申上候事

一四月廿九日未刻丸山於や阿弥御料理被下置候、御先例之処者於御

屋敷被下置候之処、只今之御屋敷御間御狭少ニ付丸山ニテ被下候、

此段御留主居より御丁寧之御挨拶被下候

円山や阿弥ニ而之席座御先例

一向側館主佐々木甚三郎矢倉九左衛門桂彦左衛門山脇市兵衛山口長

右衛門、同向合而床脇上林春松木津や与左衛門同仁平

一御座敷 床御懸物

立花

三宝御のし

入口より一帖奥刀かけ

御料理御献立

けん青梅

御鱈

くり 木くらげ たい せうか

御汁ふなつ、切

御飯

御煮物

竹の子 しい茸 塩ます

花しお 御かうの物大根なすひ

御菓子碗 源氏巻ふ あんへい

二ノ膳

御汁 白か午房塩鳥

御焼物

大鯛 塩やき

御吸物 ひ□

引盃

御中酒 伊勢えひ

御吸物蛤

生ゆば おろし

御したし物 順才

御蒸子菓子五種

此御菓子 御先例之通御国より 御取ヨセ

御干菓子七種 御薄茶銘々江被下ル

一最初御留主居より之御口上之次第

今般 旦那初入之料理廳末ながら進被申候、当於屋鋪ニ可進之処、

間せは二有之候故爰元ニテ進被申候、御ゆるりと御酒も上ヶ度候

処、猶後段ニ一刀(ママ)ニおいてゆるりと進可申間、其御心得

ニテ宜様御上り可然御座候、尤料理向之処は国元同様ニ申付候而、

甚廳末至御座候宜と御口上被下候

一銘々家来共被下候

一や阿弥座敷未過刻より六ツ時御膳引ケ申候、直様一刀江一統参ル、

一刀座ひらけ候処七ツ時

翌晦日御留主居御役所并阿部祐左衛門太内利左衛門

桜川武次木内泰助西山宅兵衛

江原半兵衛

右御銘々御宅江為御礼参上仕候、手札勤ル

尾張藩数奇屋頭の食の好みと茶会

坪内淳仁

尾張藩に御用茶を納めた茶師・上林春松と尾崎坊有庵は、御用茶詰の窓口となつていた尾張藩数奇屋頭に對し、過剰なまでの接待を行った。この接待の具体的な様子や目的は、拙稿「宇治茶師と尾張藩 文化期の御用茶詰を中心として」（岸野俊彦編『尾張藩社会の総合研究』第三篇）、二〇〇七年、清文堂）を参照していただきたい。

この接待の中で、上林春松家では饗応などを行う際、御数奇屋頭の食べ物の好みや抹茶の点て方にまで気を配っていたことが分かる。そのうち文化六年「尾州御茶詰并勤方記録」（No.〇六七）中には、御数奇屋頭の一人である末永柳慶に對する食べ物の好みなどが事細かに記されている。それは次の通りである。

末永御氏御好之品御挽茶、御菓子、御そば切、大方御めん類は何にても宜、とうふ、御酒御肴之類、焼肴、箸肴不遣候事

其外くだもの類大方御用イ、川魚ニては鯉、鮒、うなぎ宜、きすは御不エテ

鳥類ニてはあひる、きじ、^{（鶺鴒）}□く 此品不遣候事

蛸、かまぼこ、からみ大根おろし、いり酒、からしす味噌 此類御好、川魚ニてハ別而鯉、鮒、うなぎ宜趣、海魚ニてハ大方宜候得共何分生作り身ならては不宜趣也、其外かい之類、海草、のり之類青物類随分宜

作り身ならハ至テ薄ク作り候テ差上可申也

三ばいすも宜、兎角上ひん向宜趣也

この記述によると末永の好みは、めん類や鯉、鮒、鰻などの川魚、蛸、かまぼこ、からみ大根おろし、いり酒、からし酢味噌、貝の類、海草、海苔、青物類であり、不得手なものは、とうふ、酒肴の類、焼肴、箸肴、きす、あひる、きじなどであつた。また、海の魚、特に作り身が好物であつたようだ。「至テ薄ク作り」出すなど大変気を使っている。そして、末永は、「兎角上ひん」なものを好んで食べたようである。ここで見る限り、末永は食べ物の好き嫌いが多い人物であつたようである。これほど食べ物の好き嫌いが多くては、饗応する側にとつては、大変な苦勞であつたろう。

では、実際の饗応の席ではどのようなものが出されていたのだろうか。御数奇屋頭は、茶詰が終了するまで京都と宇治に数日間滞在した。この滞在中、茶師は茶会を開き、御数奇屋頭をもてなすことがあつた。その具体的な様子を「茶湯会付留」（No.五八七）から見る事ができる。

その一つが、文化六年（一八〇九）六月四日夜、尾崎坊が亭主となり、末永柳慶、上林春松、長井貞甫を客としてもてなしたものである。この茶会の懷石では、鯛の作り身に大根おろしの向附や赤味噌の汁、鮎のつけ焼きなどが出されている。先の末永の好みを鑑みると鯛の作り身は至つて薄く切られたものであつたのであろうか。また、この向附には末永好みの大根おろしも添えられている。さらに汁は赤味噌で仕立て、川魚には季節柄、鮎のつけ焼きが出された。また、同じく同記録中にある尾崎坊が亭主をつとめ、末永、春松らが参会した茶会では、鯛と牛蒡の向附や鮎のつけ焼き、海苔の入った取肴など、末永好みの物が出されていた。ただし、この茶会では、末永のあまり好みでない焼豆腐が花がつかおをかけて出された。豆腐

をあまり得意としない末永のため、焼豆腐にしたのは、亭主である尾崎坊の配慮であつたのかもしれない。

このように紹介する茶会記などの献立を末永の食の好みを考慮しながら読んでいただくと、茶会のありさまをより深く理解する事ができるのではなからうか。

史料翻刻

五八六 御献立

御献立

御熨斗

御干菓子

御鱈
けん
うとふ

御汁
長ろぎ
岩たけ

御煮物
ます
栗切重
粒しいたけ

御飯
御香の物
なら漬瓜

御焼物
南京
小鯛

御茶碗
薄葛わさび
うとんはむ
銀なん
なめたけ

御盃

塩焼
海老

御台引

御酒
味噌
鯛

御取肴

生貝 玉子 鯛小串
ゆりね かう茸

御吸物

すまし 水せんしのり

御茶

初むかし 極むかし

御蒸菓子

千歳ずし

御煎茶

折鷹 喜撰

已上

五八七 茶湯会付留

茶湯会付留

文化六年六月四日夜会

手主尾崎坊有庵

末永柳慶

客 上林春松

長井貞甫

待合玄関たはこ盆

次床せきしよう鉢

席懸物

風呂はかま釜四角釜

炭取籠 香合

会席

向

鯛作身 大こんおろし

汁

赤ミそ かいほり

箸物

しい茸 あけふ たい

吸物 漬しめし

焼物

つけやき あゆ

午房香の物

菓子

手製茶巾もち

惣菓子

松葉 小緑

御茶古初むかし

未年五月七日朝

於上林三入宅茶事

御客 高畠道伴老

相伴 上林春松

懸物 細川三斎様御歌

風呂 遠州様御好

釜

香合 唐物四方

水指信楽筒

共ふた

花入 棗置花入

花きほし

花入 棗にて色ふくさ

茶碗 かうらい平

茶杓 道庵作銘小猿

こほし さわり

引切

会席

最初待合座敷にて

菓子 くり切 さとう

すゝの水のミニ入台

座鋪よりかこい□へ通り

濃茶相済候上にて

御酒 小盃一枚 はい台

平 八寸

取肴 たき、などふ
へ二ます

吸物 落シ玉子
ミそ

そば切
重箱二入て
かやく
浅草
ちんひ
ミそ

小皿入て

とうからし
花かつを

湯漬

向 あゆ
つけ焼

したし物 香のもの

下部

一取香見斗にて酒

右之通、尤実御茶事といふにもあらず、御茶ノ挽置進上致ス趣なり

於尾崎坊有庵御茶事

御客 末永柳慶老

上林春松

辻善貞

懸物 近衛様御筆

やうし二本

釜 四角庄兵衛作

風呂 ばん石

香合 唐もの

水指 備前

茶入 尾州
大納言様より拝領

茶杓遠州

こぼし

引切

会席

向 たい
午房

坪 焼とうふ
花かつを

重引 あゆ
つけ焼

かうの物
此引物 平等院ノ
丸かわら

吸物 しめし

取肴 のり
鮭

菓子 やうかん

古初むかし

惣菓子 ミとり
松は

以上

六〇一 御料理御献立

御料理

御献立

御熨斗 三宝

御向 鮎
栗白髪

水禅寺海苔